
フィールドワークする留学生

— 「多文化コミュニケーション」授業での試みを通して—

Education for International Students in Multi-lingual/-cultural Japan

A New Direction of "Multicultural Communication" Class

宮城 徹*

MIYAGI Toru

How should the education for international students proceed in current Japan, where multi-lingualization and multi-culturalization are underway? The objective of this study is to stimulate this discussion by sharing my experience of teaching and developing the "multicultural communication class (MCC)" that has been offered to pre-undergraduate students on Japanese Ministry of Education, Culture, Sports, Science & Technology scholarship at Japanese Language Center for International Students, TUFUS. MCC is aimed to provide a friendly environment to enhance their cultural adaptation through in-class and field activities. The annual changes of the contents are intended as improvements to meet changes in learning environments, and to address the needs and interest of the students.

For MCC 2009 the following three points were adopted: First, the concept of "international students" as "field workers for cross-cultural issues" was introduced. Secondly, a lecture on "the world of the hearing impaired" and lesson for blind football were implemented to highlight pre-existing sub-culture of a national culture. The third point was that clear feedbacks, such as evaluation and personal comments, were made by each student at the end of the course.

The outcome for MCC 2009 indicated the following: (1) MCC requires constant revision to meet the changing environment, students' needs and interests. (2) "Simultaneous learning" or "co-learning" by the students and teacher had a

*東京外国語大学留学生日本語教育センター准教授

positive correlation. Since the current environment is going through constant changes, it is more realistic to engage in co-learning, rather than a more "traditional one way teaching style." (3) Introduction of physically disabled persons' lives may be an effective way to enhance "field-worker style observation skills", and to highlight possibilities of cultural differences, multi-lingualization and multi-culturalization, pre-existing within our home culture.

はじめに

これまで留学生教育は、いわゆる日本在住外国人子女に対する教育とは別の場所で論じられることが多かった。しかし多言語多文化社会日本を標榜する動きが強まっている昨今、変化する日本社会で学ぶ外国人に対する教育も当然変化を必要としている。学業終了後、日本で働き続ける元留学生も増えていくことだろう。では多言語多文化社会日本において、留学生教育はどのように変化していくのだろうか。これまで、極端な言い方をすれば、一幅の絵を見せて、「これが日本語であり、日本文化である。これを真似して描きなさい」と教えていた留学生教育¹は、日本人の意識の変化、日本社会の変容などによって、一幅の絵といった単純な形で示すことができず、またどう教えたらいいかについても様々な配慮が必要になってきている。この問題に対し、本稿では、異文化間コミュニケーション入門的な授業の中で、来日したばかりの留学生と教師²が何を学び取っていくかに着目し、多言語多文化社会日本で、「留学生に何をどう教えるか」から「留学生と共に何をどう学ぶか」について考える一助としたい。

筆者は2001年度より、東京外国語大学留学生日本語教育センター（以下「留日」と略す）において、文部科学省国費学部進学留学生（以下「1年コース留学生」と略す）に対する1年間の予備教育課程において、春学期（4月～7月）に「多文化コミュニケーション」（以下MCCと略す）という授業（毎週1回90分、約12回）を行ってきている³。1年コース留学生は来日前の段階で日本語能力はゼロでも良く、留日における1年間の集中教育によって国立大学の学部の授業についていけるだけの日本語力、専門科目理解力を身につけることが期待されている。その中でMCCは、世界各地から集まった若者たちが、日本という異文化に慣れ親しむ第一歩を踏み出すきっかけを与えるクラスであり、世界のさまざまな異文化をも垣間見ることができるとなっている。

1. MCCについて

1-1. 概要⁴

2008年度までの授業の流れは表-1のように表すことができる。まずいわゆる「アイスブレイキング」活動によって、リラックスした雰囲気の中、ここは本音で語り合える場であることを知ると同時に、鏡に映った自分を見るように、来日当初の「地に足が着かない状況」であることに気づく。次にクラスのメンバーを観察し、彼らは出身国こそ異なるものの、自分同様「落ち着かずはしゃぐ者」「寂しくて、殻にこもっている者」がいることにも気づき、ほっとしたり、慰め合ったりする。さらに次の段階では、日本の風景や日本人の行動を観察し、気づいたことをクラス内で報告し合い、その意味について考えてみる。またそれらについて、日本人(教師や学部学生)に尋ねてみる。そこに「私の国では」「私の場合は」と、自己の視点を加え、より一般的な日本人に対してもそうした質問を向け、自らの力で新たな局面を打開していける基礎固めをする。つまりここでの活動は基本的に、易→難、自己観察→周囲観察→インターアクション、へと配列されている。

表-1 これまでの授業の流れ

回	内容	実施月
1	公園オリエンテーリング、自己紹介	4月
2	授業説明、日本紹介ビデオ上映、自画像作成	
3	近隣小学校訪問、交流活動	
4	自国紹介プレゼンテーション(1)	5月
5	自国紹介プレゼンテーション(2)	
6	自国紹介プレゼンテーション(3)、ハイキング先紹介	
7	富士山/高尾山 ハイキング	6月
8	ハイキング感想、自国紹介プレゼンテーション(4)	
9	自国紹介プレゼンテーション(5)	
10	自国紹介プレゼンテーション(6)、高校訪問準備	7月
11	高校訪問、交流活動	
12	まとめ	

これを「このクラスの目的」の観点からみると、暗黙のうちに以下のようなことが期待されていると言っても良い。

- ・日本社会、特に大学という場における「適切な」振る舞い方を学ぶ
- ・異文化への移動に伴うストレスについて理解することで、問題が重症化することを防ぐ、あるいは相談できる場があることを知らせる
- ・慣れない日本での生活、日本語ばかりの授業のストレスを発散する(MCCでは

英語で質疑応答したり、語り合ったりすることが許されている)

- ・同学年のクラスメイトという一体感を育てる
- ・別の教職員から連絡を受けた問題点や注意事項について、クラス担当者がその背景説明を含め、留学生に理解を促すことで、より円滑に学習が進む環境を整える

以上のような「日本への適応促進」という目的を包含しつつ開始されたMCCにおいて、これまで中心的なアクティビティだったのが、「自国紹介プロジェクト」であった。毎年の留学生の出身国は20カ国前後なので、1学期間のうちのほぼ半分以上はこの発表に当てられることになる。この活動で留学生は ①自分にとって身近なテーマを扱うことで心理的圧力が少なくて済む、②日本文化の対照基準となる自文化を再確認することができる、などのメリットを得る。他方でこの授業活動は内容上あるいは実施上、いくつかの問題を含んでいると筆者は考えてきた。

1-2. 自国紹介アクティビティの問題点

国費留学生はその性質上、「文化大使」として自国と日本の友好関係をより強めることが期待されており、彼ら自身もその役割を熱心に果たしてきている。しかしそこにはいくつかの問題点がある。第一に、そうした交流会は、日本人側からすると15分程度の簡単な留学生のお国紹介話を聞き、外国料理を食べただけで、「国際交流活動をした」と満足してしまう傾向があり、留学生個人とそれ以後も交流、交友関係が進むということはほとんどなく、1回きりの「交流ごっこ」に終わってしまうことである⁵。

第二に、聞き手、話し手双方の中に生じる「その国に対するステレオタイプ」の問題がある。15分程度で、ある国についての確にかつ十分に語ることは難しく、聞き手が関心を持ちそうな、あるいはある程度相手国にも知られている文化的特徴を二、三紹介することになるだろう。それだけの情報が聞き手に植えつけられるということは誤解を招きかねない。またそんな活動によって、その留学生自身も別の文化に対してそうした簡略化された他国理解で満足してしまうことになるなら、非常に残念なことである。

第三に、これは自国紹介に限ったことではないが、近年留学生のパソコン(パワーポイント)、ネット情報依存度が高まり、発表にオリジナリティや発表者の人間味が感じられなくなってしまったことである。元来、聞き手はある事柄が語り手個人のフィルターを通ることによって、現実味を帯びて伝わってくることを実感する。換言すれば、たとえネット情報を用いていても、発表者がそれを咀嚼し、理解したものを発表

内容に表現しているかどうか、受け売りでおざなりになっていないかが重要だと言える。ところがこの作業を来日間もない留学生が、授業前に準備することは非常に難しい。これが、最近のハイテク依存の自国紹介アクティビティの大きな課題である。

1-3. 2007年度と2008年度の概要

以上の反省から、2007年度には当時話題になりつつあった環境問題を全体テーマとして各国の環境破壊について報告をしてもらった[宮城2008]。各留学生からはさまざまな環境問題が報告され、それらの問題がいかに私たち地球の現在と未来を蝕みつつあるか気づかされることになったが、あまりの問題の大きさに、筆者も留学生も暗澹たる気持ちで授業を終えることになった。

2008年度には前年度の反省から、「自国の文化や状況について、誇れるもの、他国に知らせたいものをひとつと、誇れないもの、あまり知られたくないことについてひとつ紹介すること」と指示した。これによって、各国の光と影の双方に着目させようという試みだった。オリジナリティを重視し、パワーポイントやビデオクリップに頼り過ぎないように指示した。発表のあとの話し手、聞き手双方の感想は比較的良好であったが、筆者には自国を見つめる視点が十分に養われていないのではないかと思われるおざなりの発表が目立った⁶。観察、描写、意味づけなどの視点を学びあう能動的な授業の必要性を強く感じた。

2. 2009年度MCCでの試み

以上の経験を踏まえ、2009年度は授業の目的自体についても変更を加え、新たな授業活動と課題を与えてみることにした。それは「君たちは日本に何をしに来たのか」という問いを投げかけるものにしたという意図があった。留学生には留学生なりの日本留学の目的がある。それと同時に、留学生、特に国費留学生には、日本で学位を取得するだけでなく、ある意味では、さまざまな「日本性」(Japaneseness)を自らに取り込み、日本的思考と日本的嗜好を身につけ、それらを自らのアイデンティティの一部として生きてもらいたいという日本国政府の期待も同時に存在している。しかしどんな留学意図を持った留学生であれ、日本で生活し学ぶ際に有用な能力、姿勢があるはずであり、特にその「姿勢」の部分を扱う授業にしていきたいと考えた。

その頃筆者が偶然手にした『アクション別フィールドワーク入門』[武田・亀井編2008]が授業の方向性を決めた。ここでは多くの若手研究者たちが、世界各地の多様な分野で、独自のフィールドワークを体当たりで繰り広げる模様が興味深く記述され

ていた。亀井[2008: 129]はここでフィールドワークという調査方法の利点についてこう指摘している。

長所1：自分の手で一次資料を入手できること

長所2：長い時間をかけて緻密な理解ができること

長所3：現場から立ち去れないために、その場で思考するようになること

亀井は続けて言う。

調査者は、自分の出身の世界(ホーム)を離れ、はるか遠くの調査地(フィールド)に来てしまった以上、たやすく現場を立ち去って帰ることができないという状況に身を置く。その結果、好むと好まざるとに関わらず、その地域や集団のなかからものごとを見たり考えたりする習慣が身につく、この強制的な視点の移動のなかで新しい世界観を発見したり理解したりする。

この文章を読んだ途端、筆者は、「留学生はフィールドワーカーそのものである」ということに気づくに至った。留学生とは一般的に自国以外の国に一定期間在留し、学問や技術を学んでいる者のことを言う。そして海外に滞在する一定期間、彼らはそこで住人として暮らし、人生の一時期、それも積極的に見聞を広めようという意識を持っている貴重な時期を過ごすことになる。したがって、留学生は好むと好まざるとにかかわらず、日本をフィールドにし、様々な観点から「フィールドワーク」をこなすことになる⁷。

もう一点、筆者が前掲書で注目したのは、亀井氏が日本人大学生に対して実施している「ろう者の世界を体験する」授業であった。そこでは、ろう者の住む音のない世界を知り、「彼らはいへんだなあ」「私は音が聞こえて良かった」といった一時的体験に留まらず、そこから一歩踏み込み、ろう者の世界が大きな広がりを持って非ろう者の人たちの世界と共存している、いつもすぐ隣にあるという意識を生み出す試みがなされていた。多くの専門家が指摘しながらもあまり注目されていないことだが、「異文化＝外国」という発想は多くの誤解を招く固定観念である。「お隣の異文化」の事実を無視、軽視してしまうことには注意しなければならない。そして「彼らには彼らの世界が成立、機能しており、様々な異文化が共存して世界全体が成り立っている」という理解を得ることは、多文化多言語共生社会の住民としても大変重要なことである。

前掲書の共編著者のひとりである亀井伸考氏は偶然にも本学アジアアフリカ言語文

化研究所研究員であったので、さっそく連絡し教えを請うた。幸いにも亀井氏の賛同を得て授業にも協力を仰ぐことになった。さらに本学平和構築学博士課程学生で、目の不自由な留学生Mohamed Omer Abdin（以下アブディン）氏にも授業協力を依頼することとなった。また博士課程院生M氏にはTA（ティーチングアシスタント）として補助を願った。

2-1. 活動の中心姿勢の設定

「留学生＝フィールドワーカー」という視点から、「1年コース留学生＝フィールドワーカーの卵」という位置づけが可能であり、授業の中心テーマは「フィールドワーク入門」ということになっていった。しかし授業開始時はまさに手探りであり、その中心テーマについては最終回になるまで表明されなかった。また授業活動の内容は1. 観察、2. 描写(ノート作成)、3. 報告、4. 解釈(意味づけ)、5. 評価、と徐々に広げることにしたが、中心的な活動は3の報告までとした。これは活動の初期の段階からこれまでの価値観や判断基準に基づいて早々に結論を下してしまうことを避けたかったからである。

2-2. 活動スケジュール

2009年度の授業の流れ、主な内容は表 - 2 のようになった⁸。昨年までの流れ(表 - 1)と比較されたい。

表 - 2 2009 年度授業の流れ

回	内容	実施月
1	授業説明(授業の目的)、自画像作成、フィールドノート準備	4月
2	観察する、構造を考える、話し合う、報告する	
3	野川公園オリエンテーリング	
4	公園ツアーで見つけたもの、小学校訪問「拾う」準備 1	5月
5	小学校訪問(2:40 ~ 4:00)、往復の道でも観察を!	
6	小学校訪問感想、「拾いもの」紹介 1 (グループ討議)	
7	高尾山について(TOFSIA)、高尾山ハイキング準備(グループ活動)	
—	休講(雨天のため、多摩センター周辺見学)	6月
8	「多摩センター周辺見学」感想、「拾いもの」紹介 2 (グループ討議)	
9	ワークショップ 1 (亀井氏・アブディン氏による分割授業)	
10	高校訪問	
11	ワークショップ 2 (ワークショップ 1 とは異なる講義を受講)	
12	まとめ「このクラスで見つけたもの」	7月

授業の基本的姿勢は、

- 1) アイスブレイキング(話してみる、聞いてみる)

- 2) 身近なものや自分を観察し、描いてみる。持ち帰って報告する。
- 3) 目的地(たとえば研修先)およびその周辺を観察し、描いてみる。報告する。
- 4) 自己省察(温める)

という流れであり、たいいていの場合、宿題(課題)を翌週の火曜日夕方までに提出し、今回の授業内でも簡単に報告するという形を取った。

2-3. 具体的活動に対する参加留学生の反応

以下に毎回の授業での活動内容についての概略を説明した後、主な活動に対する留学生の反応を宿題やアンケートに書かれたコメントをもとに分析する。

(第1回)自己紹介の後、4人グループに分かれ、日本でよく見られる光景を描いたイラスト[高岸・松本・川越1991] (例えば上司におごってもらって頭を下げている部下、授業中にガムを噛んだり、飲み物を飲んだりしていて先生に叱られる学生など)を見せ、「①何をしているのか考える。②日本においてはその状況はどう解釈されるのか考えてみる」活動を行った。学生の解釈に対し、筆者は正解を答えるのではなく、こういうことが起こりうる、現実起こったときにその状況をよく観察するようにと伝えた。起こりうる出来事を理解し、それがどう認知されるかに配慮できるかどうか重要だと考えたのである。

例年授業中に描かせる自画像は時間の関係で宿題となった。「今の自分の気持ち、自分の顔を描いてみよう」と指示した。何人かは風景画的なものを描いていたが、ほとんどが自画像を提出した。そのうちのいくつかが図-1である。

原画はほぼB5判の画用紙に描かせたものである⁹。ここではあえてそれらの解釈に踏み込まず、来日直後の留学生が期待や不安、喜び、悲しみ、無気力など、さまざまな心理状況に置かれている、その様子が表れているようにみえると述べるにとどめた。



図 - 1 自画像例

(第2回)心理学などで使用される「錯視図形」を見せ、我々は一つのものを見ても必ずしも同じ認識をしているわけではないことを確認した。

次に「一見単純な形をしている日用品はどうやって製作されているかを考える」活動を行った。学生を5、6名のグループに分け、各グループに紙コップを配布し、「これと同じものを作るにはどうしたらよいか話し合おう」という課題を出した。グループ全員で話し合うグループ、2つの小グループに分かれて相談するグループ、一人一人別々に考えるグループなどがあった。紙コップの側面と底を分解し、側面を広げて形を確認する者もいた。

座学の連続で留学生が飽きないように、グループで解決策を見出す作業を中心とし、柔軟な視点と発想の豊かさが観察作業には必要であることを伝える努力をした。また様々な共同作業を通して、自分の役割や居場所を確認する時間となることを期待した。

(第3回)今回の野川公園探索では、行き帰りの道においても様々な観察(日本家屋、交通標識、農作物や草木の様子など)をするように促した。公園内では、植物園や自然観察園の見学が中心となった。そこで日本の湿地に見られる動植物やホタルについて学んだ。この回では「行き帰りを含めたフィールドトリップにおいて、あなたにとって見慣れないもの、人、人の行動などについてフィールドノートを書きなさい(イラストを描くこともよい)」という課題を与えた。アパートの外部階段(自国ではたいてい内部にある)、廃品回収車の放送、一人一人区切りのついたベンチ¹⁰、お年寄りの多い公園、視覚障害者用の道路タイル、不思議な微笑みを浮かべた政治家のポスター、自然観察園の展示方法、墓石の形など様々な指摘がなされた。

(第4回)前回の野川公園ツアーの振り返りをした。コメントを書いた学生に再度口頭で説明をさせ、それについて別のメンバーの意見、感想を聞いていった。筆者はここでも個人的意見を述べても、結論付けないように試みた。続いて次回に実施される小学校訪問について、前回同様、行き帰りの道も含めて観察をしつつ、小学生とのコミュニケーションに好奇心をもって臨むように指示した。

(第5回)毎年恒例の「白糸台小学校訪問」を実施した。小学校体育館に入るとまず靴を脱ぐように指示され、小さなスリッパを履かされるのに驚く者も多い。そして大勢の小学生が規律正しく挨拶し、歌い、太鼓をたたき姿に圧倒される。その後小グループに分かれて、カルタ取り、双六、こま回し、縄跳び、留学生の出身地についての質問など様々な活動が始まり、留学生もやっと溶け込んでいく。最後に双方の代表がいさつをし、小学生が並んで作ったゲートをくぐって体育館を後にした。短時間にたくさん刺激を受け、小学生の様々な反応について興奮して話しながら帰途につく留学生の姿が印象的であった。

留学生作成のフィールドノートには、礼儀正しい小学生、厳しく指導する教師¹¹、お琴の演奏が女子だけなのはなぜか、日本人が器用なのは折り紙で鍛えられているからか、などの報告、問題提起があった。一方、行き帰りの道での発見には、野菜無人販売所¹²、古紙リサイクル工場、マンホールの種類¹³、車のナンバープレートの色(白、緑、黄など)、などが指摘された。言葉での説明を補足するイラストも数多く見られた。

(第6回)前回の小学校訪問での発見が多量にあったので、グループ別に報告、討議、解釈を行った。発言、質問が増え、留学生が一連の作業に慣れてきた様子がかがえた。

(第7回)次回の「高尾山ハイキング」(MCCは休講)に備え、TOFSIA(注2参照)学生による「高尾山紹介」があり、それに質疑応答を加えた。ハイキングの注意事項を説明した後、これまで同様、行き帰りを含めて「日本観察」を行い、レポートを提出するように指示した。残念ながら次の週は雨天となり、高尾山ハイキングに代わり、多摩センター駅周辺の見学となったため、「多摩センター周辺見学レポート」の提出を指示した。

(第8回)多摩センター見学に関してのグループ討議を行った。「早く、早く」と急がせる引率教員、傘好きの日本人、店の入り口にある傘をビニールで包むための機械、至る所にある傘立て、ガムを噛むのが好きな日本人、電車内に見られた大学の広告などの指摘があったものの、高尾山ハイキングへの期待が大きかった¹⁴せいか、留学生(と前回口頭発表したTOFSIAメンバー)の落胆ぶりは著しく、討議は湿りがちであった。

(第9回)二講師による分割授業のため、筆者はアブディン氏によるブラインドサッカーに参加した。氏の指導のもと、アイマスクと鈴入りサッカーボールを使用して、基本的なキック、パス、ドリブルなどを練習した。グラウンド脇の飛行場のヘリコプターや走行する車の騒音で、ボールの鈴の音がかき消され、筆者は全くボールの行方が分からなくなってしまうのだが、アブディン氏はきちんとボールの行方を追うことができているのに驚かされた。だがメンバーの支え(身体的心理的双方)によって、短時間で留学生も筆者もボールを追い求めて動き回れるようになっていった。蒸し暑い午後で、誰もが共に空地脇の水道で水を飲み続けたときに、教師と学生の関係がふっと解かれたようにも感じられた。

一方、亀井氏による「ろう者の世界を学ぶ」講義は教室で行われた。こちらはTAがサポート兼見学を行った。授業は英語リスニング用ビデオ教材(アメリカ人講師による授業風景)の一部を用い、まずこのビデオの音声をゼロにして、映像だけから授業の内容を推測したり、感想などを書かせたりした。次にノートテイク(筆記通訳)資料がついた場合、さらに音声付で見た場合と進み、ワークシートに記入した内容に基づき、グループ討議を行った¹⁵。授業についてはTAから、「(はじめのうちは学生も楽しんで発言していたが、ビデオ鑑賞以降、)昼過ぎの時間帯に音のない授業で眠くなった学生が見られた。もっと学生たちに発言させてはどうか」というコメントが寄せられた。

(第10回)貸し切りバスで狛江高校に到着。全国的レベルにある箏曲部3年生による迫力ある演奏の後、留学生も琴に触れる機会を得た。隣室で茶道部がお茶席を用意してくれており、茶道の手ほどきを受けた。これらの体験に引き続き、グラウンド、体育館、校舎内で行われているさまざまなクラブ活動の様子を見学した¹⁶。

その後、例年通り大教室に移動、留学生と高校生が語り合う場を設定し、「話の概略を記し、その記述の後に相手の高校生からサインをもらう」というタスクを与えた。

その報告をみると、多くの留学生が授業以外の事柄(たとえば、石庭のある中庭、上履き・外履き、図書館入口の返却箱、制服、スポーツ)に関して話していたが、中でも約半数は部活動についてであった。それは多くの留学生にとって母国の高校では部活動がないこと、直前に箏曲部や茶道部をはじめ、部活動に参加している高校生の姿を見たこと、箏曲部員や茶道部員の何人かが交流会にも参加していたことなどが影響していたと考えられる。その他の特徴として、今回は特に指示しなかったのにもかかわらず、22の報告のうち、12にイラスト(例えば石庭、外履き・上履き、返却ボックス、交流した高校生の似顔絵、柄杓など)が描かれていたのは、この授業で求められているものが何かを留学生が察知できるようになったからかもしれない。

(第11回)第9回にブラインドサッカーを体験したグループは「ろう者の世界」講義を、他方はブラインドサッカーを体験した。両講師とも前回の授業に対する学生やTAからのコメントをもとに、授業内容や方法を修正して授業に臨んだ。筆者は「ろう者の世界」に参加した。音声が消されたビデオ映像(講義場面)は筆者には全く授業内容が理解できなかつたし、筆記通訳資料があつても、決して満足できるものではなかつた。また音声のない映像を理解しようと最初は集中して画面を見つめるが、長続きせず、睡魔に見舞われたのは、一部の留学生と同じであった。まさに教師が学生の立場となって授業に参加することで共通の感覚を得ることができたのは皮肉であった。しかしろう者もこの「理解を早々に断念してしまう」(手話を用いない者とのコミュニケーションに消極的になる)状況に至っているのかもしれないと想像すると、とても残念なことに思われた¹⁷。

一方、アブディン氏の授業は、TAのサポートの下、前回の反省からまず教室でブラインドサッカーに関するビデオ映像を見てイメージを把握した後、本学グラウンドで実習を行った。アイマスクの用意を忘れたため、留学生は目をつぶってアクティビティを行った。前回に比べ、各スキル間の連携が円滑に進んだようであった。

授業後、両講師と共に授業の進行状況について討議した。留学生からのフィードバックを精査しなければ当初の授業目的が達成できたかどうかは分からないが、少なくとも

も受講生の反応は悪くなかったという結論で一致した。

(第12回)最終回ではこの授業の目的が「フィールドワーク入門」であったことを伝えた。次にこれまでを振り返り、印象を語ってもらった。「わずか2、3か月前なのに、一生分くらいの変化があった」「ずいぶん時間がたった気がする」といった感想が語られた。またある学生から、「先生はいつも、『かもしれない』、『〜と考える人もいる』、『私はこう思う』といった具合にあいまいに答えていたけれど、答えは一つじゃないと教えられた気がする」といった発言があり、それはリップサービスであったとしても、筆者に一定の手応えを与えてくれた。その後、授業内の様々なアクティビティについて、5段階評価のアンケートを実施し、授業を終えた。

2-4. 授業アンケートの実施と結果

授業アンケートは学生番号を記入した上で各回の活動および授業全体について5段階(5 quite interesting – 4 interesting – 3 neutral – 2 boring – 1 quite boring)で評価し、さらに必要に応じてコメントを記述するという形式であった。しかしこれは教師(成績管理者)が実施したものであるから、回答者は本授業について否定的なことは書きにくくなるのは当然のことである¹⁸。この点を十分に念頭に置いた上で、結果を分析したい。

まず各アクティビティに対する評価結果を示したものが、表 - 3 である。なお回答者数は26名である(授業に欠席したにもかかわらず回答した者の回答はその部分についてのみ除いてある)。

表 - 3 各アクティビティの学生評価

自画像 /イリュ ージョ ン	野川公 園	白糸台 小訪問	多摩セ ンター	亀井氏 (合計)	亀井氏 (前半)	亀井氏 (後半)	アブ デイン氏 (合計)	アブ デイン氏 (前半)	アブ デイン氏 (後半)	粕江高 校訪問	全体
3.48	3.92	4.71	3.4	4.25	4.08	4.42	4.33	4.08	4.58	4.54	4.17

結果 1 : 学校との交流活動の評価が高い

結果をみると、第一に小学校や高校との交流活動は評価が高い。これはキャンパス・教室を離れた参加型活動であること、1年コース留学生がよく口にする「先生以外の日本人と話してみたい」という要望を満たすものであることなどが関係しているだろう。

留学生からの自由記述回答を見ても、否定的な回答は小学校に関して0(全回答数16)、高校に関しては1(全回答数20)しかなかった。小学校に関しては、

- ・ *Was a very positive experience. Cheers up! Found out interesting things.*
- ・ *Good. Communicating Japanese was funny. The language problems occurred so often.*

といったコメントがあり、日本人小学生とのソフトな接触が来日直後の留学生にとって心地よい体験となっていたことが理解できる。一方、高校に関するコメントにも、

- ・ 私たちと同じ年くらいの日本人学生と喋ることができて、日本高校生活についてもっと知ることができてよかったです！来年大学に入って、日本人の友だちを作りたいときは役に立つと思う。
- ・ *Having the opportunity to participate on a tea ceremony was really great. When talking with the students I experienced a cultural clash [not country, but social group related, (way of thought)].*
- ・ 日本の高校生は、やっぱり自国のと違うなと思った。高校生になるぐらいの年で世の感覚が変わっていくとわかった。

と交流活動への積極的な参加の結果、さまざまな体験と感想を得たことがうかがえる。この二つの交流活動はMCCにおいて今後も重要な位置を占めるであろう¹⁹。

結果2：亀井氏、アブディン氏授業に対する評価も良い

亀井氏の講義は4.25、アブディン氏の授業は4.33と、内容、授業形式は大きく違いながらも、双方とも評価は高かった。なお双方とも1回目と2回目では評価が向上している(亀井：4.08→4.42、アブディン4.08→4.58)が、t(平均値の差の)検定から有意差は認められなかった。これは受講者数が1回12名程度であって、統計的有意差を示すことが極めて困難なことを考慮しておくべきであろう。留学生のコメントをいくつか挙げておく。

(両授業に関して)

- ・ *I think these (二氏の授業) are the most interesting part of the whole MCC classes.*

(亀井氏の授業)

- ・ 耳の聞こえない人たちの世界に色々な「言葉」があることがわかって感動的だった。

た。

- *Getting to know that there's not only cross-country communication, but also great differences (causal) even in my own country.*

しかし他方で、今後の授業改善に参考にすべきコメントもあった。

- 興味深かった授業ですが・・・正直ちょっとねむかったです。すみません。
- (前半略) *On this class, I realized the value of hearing. I'm happy that I can hear.*

金曜日午後、音のない講義は眠気を誘うものであるのは筆者も痛感したが、これについては第2回の授業でアクティビティを増やすことでやや改善された。しかし2番目のコメントは、亀井氏が意図している「“おぎなりの聴覚障害者理解”打破の試み」が不十分であったとも考えることができ、さらなる検討が望まれる。

(アブティン氏の授業)

- *It was the first time playing blind soccer. After the session, I realized a lot of things about people those who are not able to see.*
- *Compared to other sessions, it was really interesting. Blind football, that's I've never thought of.*

留学生からは

- *It was too hot, there wasn't any wish and power of will in nobody to have fun.* (原文ママ)

というコメントがなされた。これは実施1回目が梅雨の晴れ間に行われたこと、解説ビデオがなく、授業全てが野外で行われたことなどが原因であろう。前述の通り、2回目には教室内でビデオ解説を行った上で野外活動に入るという改善が図られた。

結果3：比較的評価の低かった活動

第1回授業と多摩センター見学が比較的低い評価となった。これは、筆者の中で今年度の授業について十分な方針、目標が定まっていなかった上に、諸々の事情からア

イスブレーキングを兼ねている野川公園ツアーに先行する形で、第1回授業を実施せざるを得なかったことが一番の原因であろう。また多摩センター見学については、前述の通り、高尾山に関する事前学習を十分にした後での雨天変更、代替案だっただけに受講生の落胆ぶりが大きかったためと思われる。

さらにアクティビティのいくつかをt検定してみた結果、たとえば「小学校訪問の評価平均値と野川公園探索の評価平均値」には有意な差が認められた。しかし概して今回のような少人数クラスの授業効果を統計的に検証しようとすることは困難があることは、アクションリサーチを実施する上で認識しておくべきであろう。

担当教師による授業評価調査であり、控え目に見るべきであるが、比較的自由に書かれたと思われるコメント内容を考慮してみても、全体平均として4.17という高い評価を得ることができた本授業の活動は、参加学生に興味を持って受け入れられたと考えられる²⁰。

2-5. 授業後の留学生の変化

授業によって受講生が何を学び、彼らの中で何が変わったのかを知ることは容易ではない。今回は「この授業期間内に見つけ出したモノ・コトで最も印象的なものについて書くように(授業中だけの発見にこだわらなくて良い)。これは成績に影響しない。」という指示を出し、回答の様子と内容から間接的に受講生の理解を解釈する方法を取ってみた。

課題は26名全員から提出され(1名は氏名以外無回答)、A4用紙にびっしりと書いた者が多かった(19名)。トピックは以下のように非常に多岐にわたっていた。日本文化[日本語と文化の関係、自転車文化、身障者用トイレ、新学年の開始時期など]、日本人[謙虚さ、礼儀正しさ、規律意識、多様性、韓国観、外国人との接し方、身体的接触を避ける、けん玉の発明、お辞儀、時間厳守など]、高校生[考え方、茶道から見える日本文化、部活動、女子の制服、汚れた校舎内など]、ブラインドサッカー、世界から集まっているクラスメートとの出会いと学び合い、日本と母国の空の違い。答え方についても、紋切り型のは少なく、オリジナルな意見が多いように感じられた。その中のいくつかを検討する。

(文化比較)

- ・インド人とブルガリア人はyesの意味でくびをよこにふることがおもしろかった。(中略)学生[高校生]の90%が部活をするってことは以外[ママ]だった。韓国の高校生がかわいそうだと思った反面、日本の高校生の未来を心配した。(日

本の部活はきびしすぎる!) (原文日本語ママ)

- First授業の後、わたしは日本に住んでいるだけより、日本を研究するのは大事なことだとわかりました。わたしの留学の目的はまずは、モンゴルから見える空と日本から見える空がちがうかどうかを知るためである。(中略)モンゴルのくもはとても低いで、日本のくもはとてもおおいです。これは、平均標高はモンゴルのほうが日本よりずっと高いのである。(中略)そして、今わたしはこのようになちがいを見つけるために勉強しています。(原文日本語ママ)

自国と他国(多くの場合日本)を比較し続け、両国に対してコメントをし続けることができるのが、留学生の特権であるといえるだろう。特にこの2番目のコメントは筆者の授業意図を理解してくれたのではないかと思いたい。

(ステレオタイプとは距離を置く)

- *I met a Japanese guy in Shorinji kempo club, observing him I found out a simple but great quality of being humble.....I have also met two persons who have made me realize there are black sheep everywhere; the guy I met at the gym may be one of the rudest guys I have ever met.*
- *My strongest discovery was indeed normal life in Japan. I thought of Japanese people as really polite, although with continuous observation it is possible to see the strange type of politeness. It is just the same as my country, there's really polite people and rude people, the difference: the polite to rude ratio is greater here.*
- *I don't think I had chance to observe Japanese culture and people in full sizes. Since I only met very happy, hospitable, and considerate people, and went to beautiful interesting places. So I'll write what I've found from my international classmates.....*

盲目的な日本称賛、蔑視に陥らず、また授業で出会った日本人、日本文化が必ずしも日本の代表例ではないことを見抜き、多様な日本の姿を見つめようとするフィールドワーカー的態度がうかがえる。

(発見は外にもあり、内にもあり)

- *So what I'm trying to say is even though everytime I went on field trips with*

this class and wrote only physical things, I actually experienced others, mentally influenced stuff..... I know that being abroad for just 3 months I won't be able to conclude anything, but at least I've learnt to be open-minded and accept others.

自国とは異なるモノ・ヒトの発見、認識を通じて、自分の中の変化、新たな自分の意識に気づくというのは、フィールドワーカーの宿命でもあり、醍醐味であろう。

(ていねいさ、思いやりについて)

- ・ *I will ever think that the most interesting, different, even shocking from time to time, is the "ていねい" levels in the Japanese language, culture, habits, everything.the polite forms of the speech makes the idea about Japan unique.....for me it's totally different here from the rest of the world I've been,..... So, this thing I take for most important when we speak about whatever related to Japan, because, as far as I've seen, it builds the Japanese everyday life, thinking, belief, opinion...*
- ・ 日本では文化と言語の関係も見やすいです。日本語を勉強してから、本当に細かい状態を述べる時、一定の文型を使わなければならないで、この場合は日本人が生活に対して気持ちに似ています。変な発見だけれども、日本の社会の理解ようになります！（原文日本語ママ）
- ・ 今まで一番印象が強かったのは、日本人と国語の関係だった。日本人は日本語が大好きで、外国人にも優しく説明してくれる人だ。（中略）他の国とは違って、日本人は愛国者で、言葉を尊重することが分かった。日本語で声をかけてみると、表情や目にある光が変わっていった。（中略）がんばっている自分に対する日本人の反応は同じだったので、いつも気持ちよかった。

複数の学生が、「ていねいさ」「思いやり」「謙虚さ」といったものが日本文化・社会に奥深く根ざしていることに気づき、それらが日本語とも密接に関係していることにも気づいている。考えてみると、彼らの日本における日本語学習という活動も、実は日本語という大きなフィールドの中を駆け巡る調査活動ともとらえられる。つまり「日本語に浸り」、「日本語を母語と比較し」、「日本語で考え」、「日本語を用い」、「日本語で暮らす」といった学習活動は、フィールドワークの基本的作業とも言えるのである。

これらのコメントを読み、筆者は何よりもまず多くの受講生が一生懸命「自分の発見」を伝えようとしてくれているという印象を受けた。また一人一人が自分の視点を大事にし、自国文化に対しても日本文化に対しても、比較的冷静に見つめていこうという姿勢が感じられた。全体として、2009年度MCCでは多くの受講生がフィールドワーカーとしての心構えと観察術を身につけたのではないかという感触を得ることができた。

2-6. 授業後の教師の変化

授業後筆者の意識にも変化が現れた。これまでほとんど連続して考えていなかった留学生の夏休み中の様々な体験が、授業の流れの延長としてとらえられたことである。留学生は夏休みの間、自国に一時帰国する者、英語キャンプ²¹に参加する者、ホームステイ・プログラム²²に参加する者など様々である。そうした活動に参加する学生に対し、筆者は「覚えているよね。何かあるか見ておいで」と目配せして送り出せるようになった。それに対し学生も筆者の意図をくむ表情を見せてくれた。彼らの表情の解釈は単なる思い込みであるかもしれないが、一方の当事者である教師の夏休み活動に対する認知が変わったという事実は、教育内容の評価においては無視できない要素であるといえよう。

3. 考察

筆者はこれまで教師の授業改善の試みは、自分の授業観察や学習者・第三者からのフィードバックに基づく省察を繰り返すことによってなされるべきであること[宮城2003, 2005, 2008]、そしてその過程を通して学習者のみならず教師も学習・成長し、新たなアイデンティティを構築していくものであると主張してきた[Miyagi 2006]。それは我々を取り巻く社会がめまぐるしく変化し、既存の知識も技術もすぐに古くなり、価値観も大きく変わる現代においては、教師も絶えず知識や技術を更新し、学習者の多様なニーズに応えられる柔軟さが必要であると考えからである。

本稿では、最初に過去9年にわたる筆者担当のMCCの内容が筆者の省察⇒新しい授業活動⇒省察といった教師と留学生のインターアクションの中で毎年変化してきた過程を概観した。この流れを改めて見ると、筆者がMCCの目的について徐々に焦点化されていく過程、留学生の立場、留学の目的を理解していく過程、「お隣の異文化」をどう理解すべきかを考える過程など、留学生の学びと筆者の学びとが次々と絡まってきているということに気づく。ここでは二つの観点からこれを確認しておきたい。第一に上述の如く、「教師の成長」の観点である。「人間の成長」は成人までにとどまら

ず、死ぬまで続くという脳科学の知見は一般に受け入れられるようになってきた。つまり教師であつてもどこかの時点で権威者、教授者として完成するというのではなく、日々成長し続けているはずである。このことは、最近盛んに行われているIn-service trainingやFaculty Development (FD)といった現職者研修を考えれば明らかなことである²³。そしてこれまでの常識、固定観念に疑問を投げかける作業こそ、文化の多様性、可変性を認め、留学生や日本に居住する外国人に接する教師(異文化コミュニケーター)に望まれるものである。その意味でもMCCは毎年変化し続けてしまい、改良を続けなければいけない。

第二に、学生(S)と教師(T)の「共学」の意識である。本学では留学生(I)と日本人学生(J)が共に学ぶIJ共学の実現を目指してきている。しかし本稿でこれまで見てきたように、数限りなく存在し、変化し続ける「異文化」「多文化」を学ぶのに、「ST共学」の意識も同時に重要である。これまでの教室活動は、一方(教師やある国からの留学生)が情報提供者、他方(残りの留学生)が情報受取者という優劣関係でありがちだったが、今回のMCCにおいては、極力、留学生も教師も答えが事前に与えられていない、あるいは答えがすぐに出ない状況に同様の立場で同じ方向を向いて立ち、インターアクションをし続け、時に共鳴する関係となったのである。

もちろん教師と学生が授業活動においてすべて対等ということにはならない。教師は授業に責任を持ち、学生より多様な視点を有し、知識をより有機的につなげてみせることができ、それを実社会の中でどのように生かすかについて考える力を備えていることなどが望まれる。さらにまさに「先に生きてきた人」として、学びの方向性を示すことができる必要がある。しかし教師が授業において一方的、権威的に多くの情報を流し続けるだけの存在であるなら、いずれインターネット上の辞書、検索エンジンに取って代わられることだろう。

さらにここで論じたいことは、「お隣に存在する異文化・多文化」「障害、バリアフリーといった問題を異文化理解としてとらえる」といった亀井氏のもたらした視点と、そこからもたらされた「留学生フィールドワーカー論」の有用性である。留学生教育の中で、これまであまり注目されてこなかった障害を持つ人々との共生を扱うことの可能性と意義を模索したことは本実践研究の柱である。つまり本稿では第一に、「異文化＝外国文化」という発想が、日本人側にも留学生側にもほぼ固定観念として存在し、その結果、留学生教育にかかわる教師も留学生を受け入れるコミュニティも「お国紹介」を中心とするステレオタイプ的な授業を良しとしがちであることを指摘した。第二に、「留学生はフィールドワーカー」という視点に立ち、MCCの主たる活動は、異文化に生きてきた他者に出会い、共通の体験をし、それを人に伝えていくというフィー

ルドワーカーマインドを滋養するためのものであるという位置づけを行った。第三に、実は「異文化」「多文化」はすぐお隣、自文化、日本社会の中にも存在すること、そのうち今回は「身体の多様性と文化」に出会うことを授業の一目標とし、筆者も留学生も共に視野を広げることができたのである。

もちろん今回の授業によって、受講生が障がいを持って生活をしている人々をどう理解し、今後どう共生していくかは全く予想できない。今回の授業効果を現段階で評価することも難しい。わずか1回の授業に亀井氏、アブディン氏が自分たちの伝えたいメッセージを的確に込めることは困難であったろう。それでもMCCという留学生に対する異(多)文化理解・適応の授業において、障がいを持った人たちの問題が大きく取り扱われたという事実は受講生にとっては一種の驚きであったろうし、異文化＝外国文化という固定観念が見直されたことは確かであろう。

おわりに

本稿では、2009年度のMCCでの新たな実践活動の経緯について、その間の筆者の省察と参加留学生による活動報告を中心にみた。しかしより広い視野から、「日本に生じつつある多言語多文化状況下において、留学生に何を教えるのか」「多文化共生という観点から留学生教育をどうとらえたらよいのか」といった問題については、議論の端緒を示すにとどまった。だが本稿で述べてきた「教師：留学生といった枠を超えて、同じ方向を見た『共学』」、「すぐお隣にある異文化に対するまなざし」、「フィールドワーカーとしての留学生」といったキーワードに示された姿勢は、こうした問題を論じる上で有用と思われる。

最後に、一人の受講生が最終課題で筆者を評した言葉をここに記すことにする。この評がお世辞であると十分に認識した上でもなお筆者は彼に深く感謝したいし、今後もフィールドワーカーとしてぜひこう呼ばれる努力をしたい。

"He is a great interlocutor!"

謝辞

これまでの授業に積極的に参加してくれた全ての留学生の皆さん、そして授業へのご協力と本研究に対して多くの有益なコメントを下さった亀井伸孝博士(現大阪国際大学准教授)とMohamed Omer Abdin氏(現本学PCS博士課程)に深く感謝申し上げます。

【注】

- ¹ これまでの日本語・日本事情教育に多様性への理解がなかったわけではないが、過度な「お手本主義」「資格主義」は日本の様々な教育活動において見られる。
- ² 例年、TOFSIA (国際交流のための学生サークル)から日本人学部学生3名程度が毎回授業に参加し、留学生をサポートしている。
- ³ 2009年度の場合、1年コース学生総数は52名。そのうち筆者が担当したのはその半数の26名。残りの26名は別の教員が担当し、授業内容も異なる。
- ⁴ 以下従来の論文形式には沿わず、時系列的かつ内省的記述を通して、授業運営と筆者の理解、心理状況の変化を詳述する。
- ⁵ もちろん留学生側の事情(勉強やアルバイトで多忙である等)もある。
- ⁶ たとえば英語が苦手なある学生は「治療費が日本より安い」「ガソリンが日本より高い」という2点を英語で簡単に説明したにとどまった。
- ⁷ 留学生を含む大学生にフィールドワークを通じて日本や世界を理解させようという試みはこれまでも行われている。たとえば京都大学留学生センター・蘭信三教員(当時)による『フィールドワークin京都』は留学生と日本人学生を交えて実践活動を行った好例である。
- ⁸ この最終版に至るまでにスケジュールは2回変更された。
- ⁹ 作成した留学生の許可を得て、一部を修正したうえでここに掲載した。
- ¹⁰ 駅構内の長椅子などにも仕切りが付けられている。これは利用者が横たわり、長時間占有しないための工夫と筆者には思われるが、ある留学生は「人と人との親密度の違いが椅子の仕切りに表れている」と解釈した。
- ¹¹ 「(交流を進めることより)小学生はプログラム通りに進行させることが大切ようだった」「(この回のイベントも大事だろうか)ここに至るまでの準備が彼らにとっては重要なことなのかもしれない」といった趣旨のことを二人の留学生が書いていた。
- ¹² 無人なのになぜお金をきちんと置いて行くのかと驚く留学生も多い。無人販売については、江戸末期、米沢藩主上杉鷹山が実施したと言われている「棒杭市(ぼつくいいち)」が代表的なものであると、筆者はあとで知った。
<http://www.city.yonezawa.yamagata.jp/shisei/shokou/bokkui/bokkuitop.html> (2010年6月16日最終アクセス)
- ¹³ 下水用ではなく、黄色い線で囲まれた消火用水栓のマンホールを発見した留学生がいた。
- ¹⁴ 2009年1月、『ミシュラン・グリーン・ガイド・ジャポン』で高尾山が三つ星に選ばれたことは留学生に知らされており、期待は高かった。
- ¹⁵ 実施内容はほぼ「アクション別フィールドワーク入門」p.132にある通りであるが、講義は英語で行われ、討議も原則英語で進化した点異なる。
- ¹⁶ 学校内で行われる部活動は多くの留学生にとって大変珍しい光景である。
- ¹⁷ [亀井2009]は著書の中で、ろう者には手話などを使った幅も奥行きも大きく広がったコミュニケーションの世界が展開されており、多くの参加者がそこで様々な創造的活動をし、日々を生活しているのだという「現実」を理解することの重要性を説き、ではそうした人たちとどう関わっていくのか、どう行動するのか、という強い問いかけを行っている。
- ¹⁸ 試験のある日本語などの授業とは異なり、MCCでは、出席、授業への積極的参加、ほぼ毎回の課題(宿題)の総合点で成績をつけることは、第1回の授業で説明済みである。
- ¹⁹ 白糸台小学校と狛江高等学校からも交流活動に対しては高い評価を得ている。白糸台小学校とは例年3月にも交流の続きを行っており、15名前後の1年コース生が参加している。また狛江高等学校からは、できる限り毎年交流を続けたいという要望を受けている。

- ²⁰ 1年コース教務委員会が学年末に行った学生アンケート結果では、もう一人の教員が担当したクラスも合わせてのMCCの評価は、「授業内容について」大変満足・満足が76%、「授業方法について」大変満足・満足が74%、「授業への参加について」大変興味を持って・興味を持って参加したが76%、「宿題や課題について」大変・大役に立ったが68%と他教科と比べても高い評価を得た。授業内アンケート結果を裏付けるものといえよう。
- ²¹ 東京都北区小中学生のためのキャンプに英語講師として参加する。
- ²² 各地方の国際交流団体が主催するプログラムに加え、本センターでは独自にホームステイ・プログラムをここ数年間企画してきている。2009年度は岩手県軽米町と北海道留寿都村にそれぞれ12名、5名の1年コース留学生の受け入れをお願いした。
- ²³ たとえば『日本語教育』第144号[2010]では、教師教育、成長、研修といった課題について特集を組んで大きく着目している。

[文献]

- 亀井伸孝, 2008, 「異文化理解の姿勢を教室で教える」武田・亀井編, 125-141.
- 亀井伸孝, 2009, 『手話の世界を訪ねよう』岩波ジュニア新書.
- 京都大学留学生センター編, 2000, 『フィールドワークin京都』京都大学留学生センター.
- 宮城徹, 2003, 「日本事情を担当する教員に求められるもの」『日本事情テキストバンク—新たな授業構築に向けて—』(CD-ROM教材)東京外国語大学留学生日本語教育センター.
- 宮城徹, 2005, 「省察的授業計画の過程研究 —REXプログラム事前研修における『異文化適応』『オーラルコミュニケーション入門』授業と研修修了生に対するインターネットカウンセリングの関連付けの試み—」『留学生日本語教育センター論集』31: 125~139.
- 宮城徹, 2008, 「1年コース多文化コミュニケーション授業の再考と新展開—環境問題を題材として—」『留学生日本語教育センター論集』34: 155 ~ 168.
- Miyagi, Toru, 2006, *Cross-cultural Adaptation and Identity Development: A Longitudinal Study of Native Japanese Language Assistants in Victorian State Schools*. Unpublished Ph. D. Dissertation. La Trobe University.
- 日本語教育学会, 2010, 「特集」今, 日本語教師に求められるもの—教師教育の課題と展望—『日本語教育』144.
- 高岸雅子・松本久美子・川越菜穂子, 1991, 『絵で学ぶコミュニケーション (会社・生活編) 20のトピック』凡人社.
- 武田丈・亀井伸孝編, 2008, 『アクション別フィールドワーク入門』世界思想社.

